

# 日本のパッチワーク(寄せ裂)

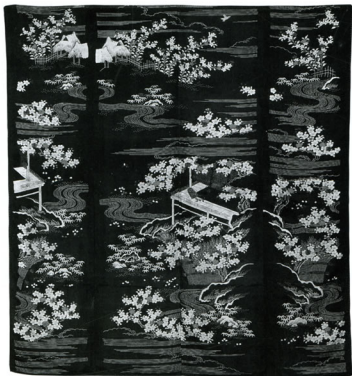
布の文化があるところには世界中どこにでも呼び名は違ってもパッチワークはあるといてよい。日本にはパッチワークに相当するものに「寄せ裂」がある。布が貴重であり、厳しい生活の中で、小裂をはぎ合わせ、衣服や生活用品を生み出すことは自然なことであった。しかし、単にものをつなぎ合わせるだけにとどまらず、そこに独自の意味や心情を生むことになる。

生前愛用していた着物を解き、打敷(うちしき)や幡(ばん)に直して、寺に奉納する習慣が古くからあった。着物を細分化した小裂をつないで正方形の敷物にした打敷は、現存する衣服の少ない江戸期の服飾文化を知る資料として、端裂をつなぎ直してもとの着物を再現する試みがされる。

小裂を縫い合わせて作る五穀袋がある。昭和30年代まで日本各地に見られたもので、日常的に穀物を入れる袋として、葬儀、法事や慶事にお互いに持ち寄ることで、相互に助け合う習慣があった。手持ちの小裂を接いで、祝儀や祈願を袋に込めながら作られた。地方によっては米袋、けしね(穀物)袋、信玄袋、端縫袋、などさまざまな呼び名がある。

袷袋には元来、うち捨てられ、誰も見向きもしないボロボロ布をつなぎ合わせたものを最上のものとして尊ばれたが、時代を経過するにしたがって、僧侶の地位の向上と共に最高の布地が使用されるようになった。江戸期のものには舶来の錦を裁断し、つなぎ合わせて一枚の袷袋にする方法が見られる。

今回は江戸期の打敷、袷袋、明治期の庶民が作り用いた寄せ裂着物を中心に展示する。比較資料として本学園所蔵のアメリカのパッチワークキルトを合わせてご覧いただきたい。



納戸平相地御所解文様打敷 江戸期(19世紀前半) 142×132cm



七条袷袋 江戸期 113×207cm



絹、寄せ裂着物 昭和期  
丈86cm 裄66cm



五穀袋